

---

# Math Destruction

Centurio

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Math Destruction

### 【Nコード】

N1264BA

### 【作者名】

Centurio

### 【あらすじ】

彼は数学が好きだった。私は数学なんて大嫌いだ。ただ一つのことを除いて、彼には嫌いなことなんて何もなかった。彼は言う。「

『世界』が壊れるのだけは、嫌でしかたがない」。相性最悪な二人の大学生が出会い、織り成す数奇なジューブナイル。

## Prologue - かりべ -

『彼は嫌いなものなど一つもないと言っていました。世界は均一、物事は並列たるべきで、そこには元来、上下や優劣は存在しないのだと』

女性は憂いを帯びた口調で言った。

体の線は細く、皮膚色は青いほどに白かった。浮き世からやんわりと払い出されたようなその雰囲気は、病室を訪れた者に異世界へやって来たかのような錯覚すら与えた。

とある病院の精神病棟。彼女は昏睡と覚醒を繰り返す謎の病気を抱えていた。一度昏睡に陥ると次に起きるのは数日後、それから一日もしないうちに意識が遠のく。

十八歳、大学一年生の頃から彼女はこの病気を患っていた。有効な治療法はなく、既に十数年をこの病床で過ごしている。

『全てを甘んじて受けとめ、全てのことに過不足なく取り組むべきである。だから何が嫌いだとは言わない、と』

発端は明確だ。学生時代、彼女は心に深い傷を負う出来事を体験したのだった。

医師は彼女を解離性の意識障害と診察したが、閉鎖的なこの病室内に心的外傷を想起するものは何一つ見当たらなかった。それでも彼女は数日に一度、定期的とさえいえるサイクルで眠りに就く。自己の症状に苦痛を見出している様子も無かった。一般的な解離性障害と、彼女は少し異なった。

『……でも、今更ですね、彼の話なんて。あれから随分長い時間が

経ちました』

女性はそう言ってほんのかすかに口角を上げた。これは彼女なりの「笑顔」だった。

病室に来ていたとある高齢の夫婦は、なんとなく決まりの悪い笑いをしながら、「知り合いを見つけるのに苦労してね」「タイミングをなかなか合わせられなくて」などと事情を口にした。彼らは女性に話を聞くためここに来ていた。

『そうですね。聞いてもらったほうがいいのでしょうかね。こちらで長く起きていられない私のためにも、彼の大切な人たちのためにも』

女性は話し始めた。驚くほどに静謐な語調で、そのエピソードが紐解かれる。

『嫌いなものなど何もなかった、だけど「世界」が壊れるのだけは嫌で仕方がなかった、彼の話……』

『Yillogg2xを微分せよ。』

ジャンキーな油の匂い、調理完了のやかましいブザー。それら現代の刺激たちは、このファーストフード店最奥の席にまで届いていた。

「うーん……むずかしい……」

私はとりあえずノートに転写だけした一本の数式とにらみ合っていた。「タイスウ」というやつだ。正直言ってこれだけでも頭脳がオーバークロック状態だというのに、問題はさらにこれをビブンしろという。

「悪魔が地上に湧いて出たような難しさだねえ、困った困った」

4

二行目にワイダツシュだけを書いて筆が止まる。アメリカ人ばかりに肩をすくめ、私は諦めのポーズをとった。

「だーって『log』の中身『2x』だもん！『x』だったら私だって解けるよお。でも『2x』だからしかたないよねー」

最後の二画を書き終えた書道家のように、儼かな手つきでシャーペンシルを置いた。

「ポテト食ーべよ」

油まみれのフレンチフライを数本まとめて口に放り、氷が薄めた

オレンジジュースで喉の奥へと流し込んだ。

ああ、数学はこれだからいやなんだ。公式は真数が「 $x$ 」の場合しか載っていないかった。「 $2x$ 」は規格外じゃないか。高度なものを求められすぎているんだ、そうだ、そうに違いない。

と、同時に、ブチツという音が耳を叩いた。

シャープペンシルの芯が折れた音である。私ではなく、それはボックス席の向かいからだった。

「お前は本当に忍耐力がない」

黙々と手を動かしていた「彼」が、はじめて口を開いた。

精悍な顔立ちを形作るその両眼が、目の前の低俗な事物から自分を遮断するかのように、真一文字に閉じている。彼の無地ノートには $3 \times 3$ 、あるいは $4 \times 4$ の数字の塊が延々と計算されていた。こういうのを何というのか私は知らない。

「だって！」私は机に手をつき身を乗り出した。ほとんど氷だけのオレンジジュースがガラガラと音を立てる。「だって、「 $2x$ 」なんだよ？」「 $x$ 」じゃないんだよ？ どうやって解くのよ！」

彼はコーヒーを口に含んだ。

「それは公式の単純な応用問題だ。与式の構造を読みとって公式の然るべき部分に代入し、答えを得る。公式は『例』ではなく『ルール』だ。それが分かっているから、その程度の問題すら解けない」

教えてもらおう立場の私だったが、このように言われるとムカツときた。

彼は数学科の学生だから言えるのだ。私はどうせ人文だ。数学は



「生命もそんなデリケートな環境で誕生したんだよ？ 環境に適応してどんどん進化して、私たちみたいないな人間になったんだよ。ご先祖様がたまたま、家系図のとおりに出会ったから、私がいまここにいる！ これって奇跡だよー！」

頓着せずに話し続けると、彼は力チ力チと芯を出して計算作業を再開した。一列が一箇所を除いてゼロになると、次の行で数字の塊が一回り小さくなった。どうやらこれを繰り返すらしい。

「その確率っていったら天文学的よ！ 私たちは生まれながらにして、宝くじの一等を引いてるようなものなの！ うんうん、だから計算一つできなくなつて落ち込むことはないの！ 自信を持ってガンガン生きればいいのよ！」

熱弁すると、たまりかねてか彼は一言をつぶやいた。

「宗教にでも嵌つたのか」

胡散臭い宗教の説法だと思われたらしかった。それでも私は一向に構いやしなかった。

私は彼の思う通り、何でも見たら聞いたら鵜呑みにしがちだ。だけれど幸福を幸福だと気づかせてくれる忠言なら、素直に受け取つたつていいじゃないか。認識できない幸福は幸福じゃない。彼はそれを分かつていないんだ。

「でも幸せでしょ？ あなただつてそうやって、数字と遊べるんだもの。天文学的確率の幸運だよ？」

彼に弄ばれるゴテゴテとした数の羅列が、やがて見慣れた一つの

スカラーにな収束した。答えに下線を引いて、その右端を二本の斜線で締める。一区切りのついた合図だった。

「俺は別に幸福だとは思わない」

「なんでなんで？」

彼は冷え切ったを飲み干すと、ノートと教科書を閉じ、片付ける体勢に入った。その動作の途中でさらりと言う。

「生まれてくるのは第一条件だ。それより前は考える必要がない。生まれなかった場合など全事象に含めても仕方がない。宇宙も、地球も、自分もだ」

鞆を肩から掛け、二人分のトレーを持っていく。

「どうしてよー！ 薄情だよね！ もっとさ、身近な幸せに感動する心ってやつを」

彼はさっさと運んでいってしまった。こうなってはもう止まりそうもなかった。

生を受けることの素晴らしさ 番組中、興奮を隠しきれない様子だった女性アナウンサーを思い出す。視聴者の私は、あのとき同じ人間として彼女と一体だった。この環は広げなければならないと思った。私の本能が訴える。

「ちょっと、私の話最後まで」

「その問題は！」

いきなり声を張られ、私は急に威勢を挫かれた。

「な、なによっ……」

こういう応じ方をされたことはこれまでになかった。こちらの気炎がやむと、彼は元の淡々な調子をすぐに取り戻す。

「その問題は、『2x』を『t』とでも置けばいい。あとはただの合成関数にすぎない。惑わされるな」

何を怒るかと思えば、ただの数学の指南だった。

「な、なんだ……そんなこと……」

私はほっとしたような、力の抜けたような気分になって、ボックス席で崩れるように座り込んだ。

彼は去り際に、もうワンフレーズを付け足していく。

「お前は、基本的に惑わされすぎる」

ブレンドコーヒーとオレンジジュースの紙コップが、氷ごとトラッシュボックスに飲み込まれた。

「どうせ私はバカですよーだ」

私は耳に届かない大きさで不平を口にしてから、アドバイスをノート余白にメモした。

二枚のトレイが回収場所に置かれ、茶番が終わる。風除室を通過して一足先に出ていった彼の姿が見えた。

普通なら逃げたほうが負けであるはず。なのに、今日は私が敗者になった気がした。



猫が鳴いた。

ファーストフード店の入り口で、彼は一匹の小動物に足元を周回させていた。通行人の目を逐一引いていたその猫は、店から出てきた私を発見すると、すぐに擦り寄ってきた。

「あ、マティ！ おとなしく待ってたんだね、いい子いい子」

茶猫の顔全体をわしわしと撫でてやり、両前足の付け根に手を入れて抱き上げた。適度な重みと温かさが、確かにそこにある生命を感じさせる。

「うちじゃじつとしてられないもんねー。困ったちゃん」

同居猫『マティ』は尻尾をふらふらと振った。大学に入って一人暮らしを始めるときに、実家から連れてきたものだ。

しばらくマティを掲げたり降ろしたりしていると、利用客が猫に気がついて各々の反応を返すのが見えた。動物の好き嫌いというのがこれで大方わかる。それを察する程度には、私は動物を愛していた。

「もう、一人で帰っちゃったのかと思ったよ。せえっかくイイ話してたところなのにさ。せかせかしちゃってもう。どーせ急ぐ用事とかないくせにねー」

「……」

彼は鼻からため息を吐いた。

どう感じているのかはだいたい私にもわかっていった。彼と私

噛み合わない二人だとは思っている。しかしそういう人とこそ話してみたい好奇心というのを私は持ってしまった。結果としてどうなるかなんて度外視だった。

しかし、そうでいながら息の詰まる空気が苦手であることも確かだった。どうにかしなければならぬ。使い方は違っだろうが、猫の手も借りたい気持ちだ。

「ねえねえ、ほらっ、にゃー」

二の腕から肘でマティの胴体を押さえ、前足を掴んで広げて見せる。私の忠猫はそれにあわせてにゃーと鳴いた。

「……」

彼は一瞥をくれたのみで、概して興味を示さなかった。だったら、そこらは実力行使に出る。

「はいっ」

出し抜けに猫を差し出すと、少年は困惑した。

否が応にもその表情が怪訝なものに変わり、口が動く。

「なんだ？」

「ネコ！」

マティはしつぽを振った。こんな人にだって懐くのだ。彼があのまま帰ってしまったのは、マティの存在があったからに違いない。

「そんなことはわかってる、俺が言っているのは、何のつもりだと

いう」

「それ、それ！」

「……！」

私は差し出す姿勢のまま、彼の胸に押し付けた。マテイの顔面が埋まり、こもった声でもがき始めると、彼はしようがなくその体重を受け取って抱きかかえた。

「虐待になるぞ」

「あなたが素直に受け取れば、いいことじゃない？」

「……。それで、これを、どうしろと？」

彼の腕の中でマテイは丸くなった。

抱き方は悪くない、どころかむしろ快適なのだろう。舌でペロつと鼻を濡らし、それから惜しげのない大あくびをした。

「いいからいいから、そのまま抱いててよ」

マテイのつぶらな双眸が徐々に閉じ、やがて喉を鳴らして眠り始めた。

間違いなく安らいでいた。動物というものは、自分を害さない者を判別する感覚においてヒトよりよほど優れている。私からしてみれば偏屈さの濃縮物である彼でも、マテイは安全な存在だと認識しているのだ。

「安心してるみたいだね。ぐうぐうしてるよ」

「安心もなにもない」

すると彼は腕の中にある温かい塊をぶんぶんと左右に振り回した。マテイは呻いて揺れを訴えるが、起きて飛び降りるまではしなかつ

た。それでも私は慌てて止めに入る。

「ああ、ちょっと、揺らしちゃだめ！ 起きちゃうじゃない！」

「起こすためにやっている、当たり前だ。こんなものを掴ませて、手放しにくくして、何がしたい？」

ひとまず揺するのをやめたところで、私は彼の荷物を持った。

「私はあなたのことが知りたいだけだよ」

今日は何限あったのか……手に提げた無彩色の鞆には、信じられないほどの重さがあった。人に当てたら気絶しそうなくらいだった。

「こっちは私が持つてつてあげる。といっても、途中までだけどね」

つまり彼の抱くそれは一つの布石だった。ただ無為に渡したわけではなかった。

私は彼のものを持ち、彼は私のもを持つ。囚人の手錠ではないが、逃げられないようにするために。

「そういう謀りか……」

「うんうん、だからさ、」

彼は悟ったようにマティを抱え直した。手の中のそれは、よりよいポジションを模索するように、頭を脇の下へと潜り込ませた。

「一緒に帰ろ、ね！」

猫が鳴いた。

新しい揺り籠の中で、心地よさそうに寝言を漏らす。



日はほとんど暮れようとしていた。落ち葉が敷き詰まる秋の季節は終わりに近づき、冬の寒風がその頭をこの街にのぞかせ始めていた。

彼と一緒に帰路に行く私は、ささやかな作戦の成功に上機嫌だった。歩調は自然とスキップを刻み、そのリズムに合わせて鼻歌が交じる。

「ねえねえ、嫌いなものってあるの？」

この強制同行は、彼のことをよりよく知っておくための施策だった。

普通なら「好きなものは？」から訊くべきところだが、彼はあまのじゃくそうだからあえて逆の質問で切り込んだ。

「……」

不機嫌そうではあったが、追及の手は緩めない。ちょっと抽象的すぎたかな、と思ってより詳細に問いかけてみる。

「食べ物とか、講義の科目とか、タレントとかだよ？」

ちなみに私なら嫌いな食べ物はトマト、苦手科目は数学だ。

どちらにも苦々しい思い出があった。小学生の頃、給食で無理やりミニトマトをねじ込まれた記憶は、今でもトマトのシミのようじに色褪せない。

「別に、何もない」

即答。しかし内容はエンプティだった。

「どうしてよ？」

「すべての物事は並列であるべきだからだ」

彼は至って真剣に言った。

「並列」 その単語には、私はいつぞや理科の時間に習った、電池の繋ぎ方しか想起されなかった。どちらが直列でどちらが並列だったか、今では覚えてもいない。

「食べ物、科目、タレント……それら集合の要素一つ一つに、元来上下や優劣は存在しない。すべて並列。だから何が嫌いとはいわない」

「……えーっと」

すぐにはピンと来なかった。脳内で咀嚼を繰り返し、やっとこさ言い回しの奥にある主旨にたどり着く。

同じカテゴリの中では物事に評価を付けない、概ねそういう意味だと解釈する。

「ふむふむ、じゃあじゃあ、嫌なことってないの？ 私は注射が嫌いだなあ。看護師さんったらね、世間話に持ち込んで意識が逸れた際に、いきなり注射バリ刺しちゃうんだよ。酷いよね？」

それが看護師のテクニクであることは、もう今の私なら気が付いていた。

それでもなお、注射というものは嫌なのだ。知ったら知ったで、他愛もないことを話し始めたら注射バリが刺さる前兆だと分かってしまう。我ながら、わがままなことだと思っ。

「あなたはどうか？ 何かあるよね？」

「それも特にならない。すべてを甘んじて受けとめ、すべてに過不足なく取り組む。理由は上に同じ。それだけだ」

それで彼の主張は終わった。肌寒い風の一陣が、乾いた落ち葉を引きずって通り過ぎる。

彼には食べたくないトマトもないし、されたくない注射もなかった。見栄を張っているわけではないし、被虐趣味でもない。

彼は単に真面目なだけなのかもしれない。嫌いだから、を何事においても言い訳にはしないからだ。

だけどそれだけで納得もいかなかった。彼の価値観はあまりに平均的であるか、平均的であろうとしすぎているかのどちらかだった。

「つまんないのー。価値観ってのはさ、好きと嫌いでデコボコしてるからこそ、面白いんだよ？」

大好きなものも大嫌いなものも私にはたくさんあった。得意でないから彼に数学を教わっているのだし、教わっている間ときどき口に放り込むフレンチフライは美味しい。

でも、私は彼とそんな庶民的で日常的な感覚すら共有できずにいるのだった。

学部が別だから、性格が違うから、そんな程度の問題ではなく、私と彼は本質的に異なっている。

「そんなじゃさー、生きててつまんなくない？ あなたに世の中がどう映ってるのか、私ぜんぜん分かんないよ」

彼と速さを合わせながら、私は回った。両手の鞆が遠心力を作り、自然と両腕が広がっていく。

物の多くない街だった。大学構内にある十一階建ての理学部棟が、まず目に入った。

あのとつぺんからは何が見えるのだろう。郷土富士は雪を冠っているのかな。

ふと目線を下げると上蓋のない側溝が続いている。

自転車でこんなところに落ちたらひとたまりもない。冬は雪が積もってなおさら大変だ。

すっかり夢の中のマティ。彼の黒い上着に毛の束がくつついていく。そういえば、そろそろ夏毛の抜ける時期だ。家の中が毛だらけになってしまう。掃除が面倒臭いなあ。

何周かの間にこれらのことを思った。回り終わると、いやに充実した気分で元のポジションに戻ってきた。

彼はじつと進む方向を見据えていた。やっぱり共有するものなど何もないのだと思った。

そういう私たちだ。同じ世の中を、全く別の視点から眺めているんだ。

「ああ、嫌いなもの……一つだけ挙げるとすれば」

脈絡もなく、彼が口を開く。

私は飛びついた。

「なにになにつ？」

「 『世界』が壊れるのだけは、嫌でしかたがない」

猫が鳴いた。

月と星が制した空に、にゃーと一声。

初めての方は初めまして。初めてでない方は、お久しぶりです。C  
センチュリオenturioと申します。

今回は大層なタイトルのジユブナイルです。

日常的なシーンが続くこの作品ですが、なろうだとのジャンルにしたらしいのが困ってしまいます。

学園？ でも学校はあまり舞台にならないし…

恋愛？ ないわけじゃないんだけど薄いんだよねえ…

てなわけで、その他、に設定いたしました。ジャンル的には不利かもしれませんがですね。

それでも読みに来ていただいた方々に感謝です。

昔書いたものを焼き直しているのと、なんだかスランプ気味なので、次の更新はいつになるかわかりませんが、長い目でよろしくお願ひします。

それでは。( ^ - ^ )ノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1264ba/>

---

Math Destruction

2012年1月3日01時50分発行